

---

# Freedom Kingdom

鳥風羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Freedom Kingdom

### 【Nコード】

N5111Z

### 【作者名】

鳥風羅

### 【あらすじ】

高校生の橋本知恵はある日、魔法陣にとらわれて楽園のような世界に落ちる。働かなくてもいいし、学校に行かなくてもいい夢のような場所。そこで行われている娯楽の一つ、『バーチャルリアリティゲーム』に参加することになった。そのゲームの内容とは――  
！？

## 序章

なんでも願いが叶うとしたら、キミは何を願う？

「何これ？」

知恵は信じられないものを見るかのように一歩後ずさった。クマのキーホルダーのついた鞆を持って足元を見る。

薄暗い教室の中で一人、知恵はなくなつた財布を捜していた。そこに突然ソレは現れたのだ。

震える足で少しずつ後ろに下がる。知恵の視界に全体像が浮かび上がった。

鈍く輝く大きな円。

その中には何重にも絡みあつた複雑な図形。

実物で見たのは初めてだ。

ありえない。こんなものが現実にあるなんて。

でも、これは――

「魔法陣……」

恐る恐る呟く。

知恵はオカルトなんて信じない。むしろ苦手な部類に入る。だが、目の前にある魔法陣がその存在を証明していた。

何か出てきたらどうするんだよっ。

鞆を胸にぎゅっつと抱き締めていると、ふいに光が弱まり何事もなかったように消えていった。

奇妙な沈黙が訪れる。知恵はその場にへたり込んだ。乱れた息を整えようと大きく息を吐き出す。錯覚だと自分に言い聞かせる。見間違えたんだ。疲れてて幻覚を見たんだ。そこに冷やりとした手が首筋に伸びてきた。思わず奇声を上げる。

「う、ごめんなさい橋本さん。大丈夫？」

心配そうな声が降ってきた。聞き覚えのある声に顔を上げると担任の先生が引きつった笑みを浮かべている。

この先生はいつもそうだ。知恵と話するとき下手な作り笑いをして場をごまかす。どうやら知恵のことが相当苦手らしい。先生だけに限らないが。

知恵は知った人が現れたことに少しほっとし、混乱した頭を落ち着かせた。

「大丈夫です。すみません、変な声だして・・・あ」

先生の右手を見る。そこには知恵の捜していた財布があった。先生は知恵の視線に気づき財布を差し出す。

「これあなたのね？トイレのゴミ箱に落ちてたのよ」

「・・・そうですか。ありがとうございます」

捜しても見つからないわけだ。さすがにトイレのゴミ箱は捜していなかった。

素直に受け取り礼を言う。すると先生は苦笑しながら「早く帰るのよ」と言っただけで逃げるように去っていった。

一人きりになった知恵は財布の中身を確認した。トイレのゴミ箱に落ちていたなんて明らかにいじめだとわかるのに、先生に何も言われなかったことがなんとなく虚しい。

中身は案の定空っぽだった。

もともと小銭しか入っていなかったのだが盗まれたことに変わりはない。しかし知恵はとくに気に留めず、財布を鞆にしまおうとした。その手をふと止める。トイレのしかもゴミ箱に落ちていた財布を鞆に入れるべきか迷ったのだ。これは、捨てるべきなんだろうか。

考えあぐねていると、足元で何かが光るのが見えた。

知恵が肩をビクリと震わせると同時に鈍く光る円が再び広がる。逃げようとしたが足が動かない。

「何でっ!?!」

恐怖で動かないんじゃない。床に足がくっついたように動けないのだ。背中に何かが這い上がってくるような嫌な焦りを感じつつも何もすることができない。

知恵を中心とした魔法陣は一気に輝きを増し、動くこともできずに眩しさに目を瞑った。

魔法陣は知恵を飲み込み、そのまま消えていった。

## 一話 よつじそ Freedom Kingdomへ

石畳の道を歩く。

周囲には出店が並んでいた。パン屋やケーキ屋、服屋や雑貨屋、そのほとんどが手作りだ。むしろ全てが、といったほうが正確かもしれない。工場で多量生産するような全く同じような物は売っておらず、形も色も味も素材も、似ているものはあっても少しずつ違っている。全く同じものがたくさん並んでいるのは気持ち悪いという考えは、少なからず理解しているつもりだ。

歩いているだけで多くの人とすれ違った。そしてみんながみんな笑っている。楽しそうに嬉しそうに笑っているのだ。悲しい人なんていない。寂しがつている人もいない。苦しんでいる人も泣いている人も怒っている人もいなかった。ここはそういう所だから。

家と店が隣接している喫茶店があった。隣接しているのは珍しいことではないが、この喫茶店は特に大きな店だった。客が絶えず来るような有名な店。しかし、今日は扉が閉まっており『closed』と書かれた可愛い看板が吊るされている。

構わず中に入る。薄暗い場所だった。あまり明るくない方が落ち着くだろう、と言っていた男を思い出す。

それほど広くない室内には木製の椅子やテーブルがいくつも並んでいる。部屋の隅には全体を見渡せるようになったカウンターも設置されていた。もちろん、客は誰もいない。

「セーガアア！！待ってたよ、遅い、遅すぎっ」

客はいなかったが、幼女がいた。二つに縛った金色の髪がパサパサ揺れる。黒いゴシック調のワンピースに金髪がよく映える。

「もう新しいマスターが来たよ。カノン嬉しくて抱きついちゃった」  
無邪気に笑いながら、セーガの袖を引つ張り奥へ連れて行くところ。

「でもね」

十歳くらいの少女は目を伏せていかにも寂しそうに言った。

「知恵姉はマスターやりたくないんだって。帰りたたって」

知恵というのが新しいマスターの名前らしい。

「カノン、心配しなくていい」

頭をなでるとカノンはすぐに笑顔を取り戻した。セーガはカウンターの隣にある扉を開ける。カノンが奥へ走っていった。

棚やショーケースに商品がずらりと置かれているこの部屋も喫茶店の一部だ。日用品や電化製品と何から何までそろっている。どちらかというと喫茶店が副業に近いのだが、それを認めない人が多数いるので黙っておく。

奥へと進むが、カノンが消えた方から騒がしい声が絶えない。大体予想はつく。マスターを呼び出すのはもう何回もやっている。

「意味のわからないこと言わないでください！元の場所に返して！」

棚の陰から覗くと、セーラー服を着て鞆を持った少女が三人に囲まれていた。

天然なのか寝癖なのか、おろした髪が肩ではねている。

「困ったな。本当なんだって。ここスツゴク楽しい場所なんだよ」  
「信じて、知恵姉。僕と一緒にここにいよ？」

「カノンも一緒だよ！いっばい遊ぼうよ」

カノンが飛びつくのをマスターは慌てて抱きとめる。三人とも参った様子だった。

「マスター」

呼びかけてみるとすぐに反応した。鋭い目でじっと睨んでくる。

「私はマスターじゃない。承諾した覚えはないです」

はつきりとした物言いに苦笑する。ピアスをつけた男がセーガに近寄ってきた。

「オレたちが何言っても信用してくれないんだよ。セーガなんとかして」

「湊みなとがゴウモンなんかするから」

投げやりな態度の男にカノンそっくりの金髪少年が嫌みたらしく言う。セレナとカノンは双子の兄弟だ。セレナもすっかりとしたスーツのようなゴシック調の服を着ている。小さなバーテンダーのようだ。

聞きなれない言葉にカノンが疑問符を浮かべた。

「セレナ、ゴウモンてなに？」

ちよっと考える仕草をしてからセレナはにっこり笑う。

「カノンは知らなくていいんだよ」

「絶対拷問の意味わかってないだろ」

マスターが眉をひそめているのもお構い無しに騒ぐので、セーガは手を伸ばした。カノンとセレナの頭をぽんぽん叩く。

「そこまでだ。二人は魔女の様子を見てきてくれないか」

「はい。部屋にいるかな」

「魔女さんにクッキーもらおうよ」

ニコニコと走り出す二人を見送る。湊は呆れたようにため息をついた。

マスターに向き直る。

「早く帰してください」

目が合ったと同時に言われた。今までのマスターとは違うタイプだなと思う。

「悪いが、それは無理だな」

「どうしてですか。私が納得する理由を言ってください」

湊たちはどこまで話したのだろうか。マスターは相当嫌がっているように見える。

「『楽園』とか非現実的なことと言って誤魔化さないでくださいね」

マスターから『楽園』という言葉が飛び出したことに驚く。楽園か。湊がそう説明したのだらう。

隣を見ると湊が口角を上げて笑っている。

「現実かどうかはあんたが判断してくれ。俺は事実を言うだけだ」

「私が納得しないと意味ないですけどね」

「そうだな」

マスターは目を逸らさない。三人が言いくるめられなかったのも分かる気がした。

「ここはあんたのいた世界とは違う。簡単に言えば非現実的な楽園だ」

「へー、ありえないですね」

「魔法陣を見ただろう」

マスターは一瞬肩を震わせて、持っていた鞆をぎゅっと抱いた。意外と不安に感じているのかもしれない。知らない所に一人で投げ出されたのだから。

「ここには何でももあるし、何でもできる。学校にも行かなくていいし、働かなくても生きていける」

そこでセーガは期待していた顔を見ることができず、少し驚く。少女は少しも反応しなかった。今まで来たマスターはほとんどがこの話をするだけで羨ましそうな表情を見せる。この少女は混乱しなければ興味も示さない。面白いと思った。

「ここにいれば自由だ。遊んで暮らせる」

「夢の国ってわけだ。オレも初めて来たときはすっげー意味不だったけどな」

「ここの人じゃないんですか」

訝しげに湊を見る。やっと食いついてきた。

「そ。オレもここの住民じゃないわけ。知恵ちゃんとは違う方法で来たんだけどさ」

「日本人ですか？」

湊はにっこり笑う。

「どうだろう。エイリアンかもしれないよ」

「湊。あまりからかうな。話が進まない」

軽く頭を小突く。

「ほんとだよ。あんたは話し下手なんだから黙ってな」

いつのまにか後ろに杖をついた老婆が立っていた。そのあとにセレナとカノンもいる。

「魔女。大丈夫なのか」

「忙しくて敵わんわ。店を開けるからとっとと出てっておくれ」

しっしっしと手を振る。セレナとカノンはマスターにクッキーを渡していた。

「今日は喫茶店あとでやればいいって」

「知恵姉と外に行ってこいって」

魔女がマスターに近づく。すいすい歩いてあっという間に目の前に立つ。まだまだ丈夫だ。

「あんたが新しいマスターかい？」

「違います」

きつぱりと言い切る。魔女はケタケタと高い声で笑った。

「いうね〜。いいよ、そのくらいがいい。正直者じゃなきゃやっていけんよ。みんなそれで辞めていったんだ」

魔女はしわの寄った手でマスターの肩をパシパシ叩く。

「いいかい？あんたは嫌がってるようだが、外の様子も見といで。気になることがあるかもしれんよ」

「私、早く帰らないと親が心配します」

「大丈夫。時間は気にせんでええ。魔女が止めてやるけんの〜」

マスターは目を見開いたが、すぐ考え直したようで仕方なく頷いた。魔法陣やら楽園やらでこの世界に常識が通じないことを理解したんだらう。今度のマスターは理解力もあるようで助かった。

「帰る方法はあるんですか」

「探しとくよ。あんたが帰ってくるまでにね」

魔女の言葉を信じたかどうかは分からないがマスターが礼を言う。すると、魔女はさっさと全員を追い出し、店を開けた。扉に掛かっている看板も『open』になった。

「セーガ、最後のマスターだ。しっかりやっておくれ」

去り際に魔女が囁いた。当たり前だ。最後のチャンスを逃すわけに

いかない。

「強引だよなあ、魔女さんは」

湊の呟きを無視し、マスターに案内するのが楽しみなんだろう、カノンとセレナはぴよんぴよんと歩き出した。

マスターは青く澄み渡った空を見上げている。そして、町に目を移す。

セーガはいつもの言葉を台本を流し読みするかのように言った。

「マスター、ようこそFreedom Kingdomへ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5111z/>

---

Freedom Kingdom

2011年12月18日07時45分発行